

発刊にあたって	山 極 伸 之
発刊に際して	金 熙 玉

序 文	9
日帝の韓国併呑に対する韓国民の認識と対応	韓 哲 昊17
韓国併合前後の都市形成と民衆——港町群山の貿易・生産・生活——	原 田 敬 一71
日帝強占期における「古都・慶州」の形成と古跡観光	金 信 在150
戦時期大邱の朝鮮人女子学生の学校生活——1937年の日記から——	太 田 修198

要旨（英文）

あとがき

執筆者紹介

翻訳者紹介

発刊にあたって

佛教大学学長

山 極 伸 之

今日、大学をはじめとする高等教育機関には、急速に進展するグローバル化社会への対応が強く求められています。様々な領域でボーダーレス化が進み、国家という枠組みを越えた多様な交流が世界中で活発に進められていく中であって、本学は仏教精神を建学理念とする大学として、開学以来100年にわたる歴史的な歩みを踏まえながら、独自の学術交流に取り組んでまいりました。

国際学術交流の面に関しては1970年代から取り組みが活発化し、アジアを中心とする諸国の大学や研究機関との交流を重ね、特に韓国、中国、台湾を中心とした仏教系の大学や研究機関等との学術交流を積極的に進めてまいりました。加えて、現在はベトナム、モンゴル、ハワイなど、色々な地域の大学や研究機関と学術交流協定を締結し、多様な取り組みを展開するに至っております。

このような取り組みの中、佛教大学と韓国・東國大学校は25年以上の永きにわたって学術交流を続けてきております。その間に6回の国際学術会議を開催しておりますが、2003年から特定のテーマのもとで両大学の研究者が共同研究のためのチームを結成して研究を進め、その内容をまとめる形で研究成果を社会に発信することとなりました。第1回目の共同研究は、2003年4月から2006年3月にかけて、「高麗大蔵經の研究」

のテーマのもとで行われ、『高麗大藏經의研究（高麗大藏經の研究）』として既に東國大学校より成果が公表されております。これに続く第2回目の共同研究が、「植民地」という日常のテーマのもと、2008年4月から2011年3月にかけて行われました。第2回の共同研究においては、現地調査に加えて成果発表のシンポジウムも開催され、それらの研究成果を総合的にまとめたものが本書であります。

韓国と日本の関係には、まだまだ多くの課題が残されていますが、それらを未来に向けて解決していくためにも、共通テーマのもとで両大学間の共同研究を継続していくことは重要な取り組みであると考えます。この意義深い研究成果が、本書を手にとられた方々によって、多方面で活用されますことを祈念してやみません。

最後になりましたが、第2回の共同研究チームに参加され、本書に貴重なご報告を頂戴いたしました諸先生に心より感謝申し上げますとともに、本書の出版のためにご尽力いただきました、両国の関係各位にあらためてお礼申し上げます。

発刊に際して

東國大学校総長

金 熙 玉

本校と日本の佛教大学は、1985年に学術交流協定を締結して以来、学生交流、教員交流、研究交流など、全学問分野において活発な交流活動が続けてまいりました。仏教精神を建学理念とする両大学は、100年にわたる長い歴史と伝統の中で蓄積してきた学問的深さや成果を、持続的な学術交流をとおして共有し、発展させてきました。

とりわけ、第1回目の共同研究「高麗大藏經の研究」が2003年から2005年にかけて行なわれ、大きな成果を得ました。続いて2008年、両大学の歴史学者が第2回目の共同研究を開始し、その結実として本書が発刊されることを、たいへん嬉しく、誇りに思っております。

この3年間、本校の韓哲昊教授、金信在教授、佛教大学の原田敬一教授、太田修教授の4人は、韓国と日本を行き来しながら、現場踏査や文献調査、討論を重ね、植民地時代朝鮮の日常の研究を行ってきました。4人の研究者は、植民地支配下の暗い時代でも淡々と日常を生きていく一般民衆の生活と意識を照明し、韓日両国の歴史意識に存在する視角の差を縮めるための議論を続けてきました。特に2010年には、韓国と日本でシンポジウムを開催し、それまでの研究成果を多くの研究者・学生たちと共有、議論する有意義な機会をもつことができました。

このように活発な研究交流をとおして、韓国と日本の学者が歴史認識

の違いを狭め、その結果を社会に広く発信していくことが大学の使命であると同時に、21世紀の韓国と日本の未来の発展に大きく寄与しうるものと考えます。あらためて本書の発刊を喜び、両大学の共同研究者たちの労苦を称する次第です。また、本書の出版のために御支援くださった両大学の関係者にもお礼申し上げ、今後とも本校と佛教大学との交流がますます盛んになっていくことを祈念してやみません。

植民地朝鮮の日常を問う

序 文

佛教大学と東國大学校との学術交流は、両校の学術交流協定にもとづく交流の一環として1985年に開始された。以来6回の学術会議を重ねたのち、2003年より双方の研究者が共通のテーマを定めて行なう共同研究の形をとるようになった。第1回目の共同研究（『高麗大藏經의 研究』2003年度～2005年度）に続いて、今回は第2回目の共同研究（2008年度～2010年度）である。

第2回共同研究を始めるにあたって、両大学に設置された学科を対象に広い研究領域からテーマの募集がなされ、歴史系教員4名（韓哲昊、金信在、原田敬一、太田修）の共同研究「日常から見た近代日朝関係史」（佛教大側仮題）、「日常から見た韓日近代史」（東國大側仮題）が採択された。私たちは、その後の調整を経て、共同研究のテーマを「植民地朝鮮の日常を問う」とすることとし、2008年4月より合計6回の日韓両地域での研究会と調査を実施した。本書は、その3年間の共同研究をまとめ、締めくくるものである。

まず、私たちが共同研究の過程で意識的に議論してきたふたつの点について確認しておきたい。ひとつ目は、本書のタイトルにあるように、「植民地朝鮮の日常を問う」ことを共通認識として共同研究の作業を進めてきたことである。植民地期朝鮮における日常史研究は、近年、特に韓国の歴史学界においてさかんになっている。その代表的な研究として、延世大学校国学研究院編『日帝の植民地支配と日常生活』（ヘアン、2004年）、イ・サンノク／イ・ユジェ編『日常史として見る韓国近現代史——

韓国とドイツの日常史の新たな出会い——』（チェックウハムケ、2006年）などがあげられる。これらの研究は、政治史、経済史を中心に叙述してきた既存の研究を越えて、植民地期の様相を、多様な側面から、特に人々の日常生活の領域からとらえようとする。さらに、植民地の日常の中に「近代」と「植民地性」が混在している側面を描き出し、それらを批判的に論じようとしている点が特徴である。

私たちの共同研究も、そうした近年の日常史研究の動きに触発されながら、植民地支配下に人々がどのように生活し、どのような思いを抱きながら日々を生きていたのか、人々の日常とはいかなるものであったのかを問おうとすることから始まった。それだけでなく、日本の植民地主義を歴史として批判的にとらえなおすために、当該期の植民地主義が人々の日常にどのように投影されたのか、また植民地主義に対して朝鮮の人々は日常のレベルでどのように対応したのか、それらを具体的に明らかにする必要があるという問題意識を共有していくことになった。

ふたつ目は、日韓の歴史認識の溝、あるいはズレをどのように埋めていくのかということである。最近ではあまりいわれなくなったが、日本と韓国は、少なくとも理念の上では「東北アジア共同体」あるいは「東アジア共同体」という未来の構想をともに持つようになった。その共同体へ向かう過程において、今日もさまざまに存在している歴史認識のズレを克服することが課題とされる。

後述するように第1回目の研究会では、植民地支配の加害者である日本側とその被害者である韓国側の学者が、植民地期朝鮮の日常史を検討することの意義を確認しあった。その後の研究会では、この問題を直接とりあげ議論したわけではないが、相互に行き来して歴史の現場を歩き対話を進めていく中で、常に意識せずにはいられない問題だった。そういう意味では今回の共同研究は、互いがより深い所で理解し合い、歴史

認識の溝を埋めていく一つ試みだったといえる。

こうした議論を経て、各自がそれぞれのテーマにそって研究を進めることになった。以下、共同研究の過程を簡単にふりかえっておく。

①第1回 2008年4月21日～22日（韓国）

最初の研究会は東國大学校で開催された。4月21日の会議では、すでに大枠では合意していた共同研究全体のテーマについて検討した。「植民地近代」が人々の日常の生活にどのように現われているのかをより精緻に分析する必要があること、植民地支配の加害者である日本側と被害者である韓国側の学者が顔を突き合わせて植民地期朝鮮の日常史を検討することは日韓の歴史認識のズレを克服するために意義深い作業であることの2点を確認したうえで、各自の研究計画を報告した。

翌22日には、忠清南道成歙を訪れ、郷土史家・黄瑞奎^{フアン ソギョ}氏の案内で日清戦争の成歙の戦跡、旧日本人家屋、李舜臣^{イ スンシン}墓地などを踏査した。

②第2回 2008年8月27日～28日（日本）

第2回研究会は佛教大学で開催された。8月27日の会議では、第1回研究会で共同研究のテーマを佛教大学側の「日常から見た近代日朝関係史」、東國大学校側の「日常から見た韓日近代史」と両案併記する形だったが、この会議において「植民地」という日常に統一することで合意した。その後、金信在「植民地時期地方都市と日常——歴史都市慶州を中心に——」、原田敬一「中国人・朝鮮・韓国人の慰霊碑建立について」、韓哲昊「韓日合併」に対する韓日両国民の認識とその特徴」、太田修「『女学生日記——大邱公立女子高等普通学校』を読む」の研究報告、および討論がなされた。

同日午後には、京都市内の三宅八幡神社（「韓国合併奉告祭碑」）、夷

川発電所、長楽館、28日には、丹波マンガン記念館、神戸港平和の碑、西村旅館跡、神戸市立図書館、同館内の「青丘文庫」などを調査した。

③第3回 2009年8月26日～30日（日本）

第3回研究会は、大阪、奈良、山口でのフィールド調査が中心となった。8月26日の研究会では、金信在「1910～30年代慶州の都市変化と文化遺跡」、韓哲昊「『韓日併合』に対する韓・日両国の反応と認識」、原田敬一「植民地期朝鮮都市史研究の現状と課題」、太田修「ある朝鮮人女学生の日記にみる修学旅行」の研究報告、および討論が行われた。

翌27日には、大阪城公園内の教育塔、奈良の平城宮跡、奈良国立博物館、28日から2泊3日で、山口県立博物館、寺内正毅墓地、陸軍墓地、萩史料館、松下村塾、松陰神社、吉田松陰歴史館、伊藤博文旧宅、木戸孝允旧宅、仙崎引揚記念碑、引揚港仙崎栈橋、長門市立図書館、長府博物館、乃木神社、日清戦争記念館などを踏査した。仙崎では、引揚者の会「むつみ会」会長・坂本史郎氏に引揚問題について話を聞くことができた。

④第4回 2010年2月16日～19日（韓国）

第4回研究会は、韓国の大邱、群山、ソウルでのフィールド調査を中心に行った。2月17日の研究会では、金信在「植民地時期慶州の都市変化と日常」、韓哲昊「『韓日併合』に対する韓・日両国民の認識とその特徴」、原田敬一「植民地都市としての群山の成立」、太田修「朝鮮人女学生の日記——大邱公立女子高等普通学校、大邱神社——」の報告がなされた。

16日、17日は、大邱の達城公園（旧大邱神社跡）、旧殖産銀行跡、忠霊塔跡、慶北女子高等学校（大邱公立女子高等普通学校の後身）、18日は、

群山の観光案内ボランティアの案内で、東国寺（旧錦江寺、曹洞宗）、旧広津家屋、群山神社跡、旧税関本館、旧朝鮮銀行群山支店、内港浮棧橋などを、19日は、ソウルで南山園（京城神社跡）、統監府跡、統監官舎跡（林権助像台座）、4・19国立墓地などを踏査した。

この研究会において、第5回研究会と第6回研究会を、共同研究の成果を公表、発信する場として設定し、佛教大学と東國大学校においてシンポジウムを開催することに合意した。

このように、第3回および第4回研究会ではフィールド調査を行なったのだが、いつもの会議室での研究会とは異なり、宿泊地での議論は白熱した。近現代史の現場を歩き、その地で生きた人々の話を聞いて、アイデアや「妄想」があふれ出てきたからなのだろう。それぞれの研究を深め、問題意識を共有するうえでフィールド調査は有意義だった。

⑤第5回 2010年7月2日～3日（日本）

第5回研究会は、7月3日に佛教大学・東國大学校共同研究成果発表会／佛教大学歴史学部学術シンポジウム「『植民地朝鮮の日常』を問う」（主催：東國大学校／佛教大学歴史学部／佛教大学国際交流センター、場所：佛教大学常照ホール）として開催された。山極伸之佛教大学長のあいさつに続いて、原田敬一「植民地都市形成と民衆——港町群山の生活——」、金信在「日帝強占期『古都慶州』の形成と古跡観光」、太田修「朝鮮人女性徒の日常——1937年の日記から——」、韓哲昊「『韓日併合』に対する韓日両国民の認識とその特徴」の順に報告がなされた。その後のパネル討論では、都市だけでなく農村の日常はどうだったのか、文字が書けない人々の日常をどのように考えるのか、などの質問が出され、植民地朝鮮を「生活」「人」の視点から見ることについて議論が深められた。

⑥第6回 2010年11月4日～6日（韓国）

第5回研究会に引き続き第6回研究会は、11月5日に東國大学校・佛教大学共同学術シンポジウム「『植民地朝鮮の日常』を読む」（主催：東國大学校国際化推進団・対外交流研究院／佛教大学国際交流センター、場所：東國大学校師範大学学林館小講堂）として開催された。チェ・スンヨル東國大学校副総長のあいさつに続いて、7月のシンポジウムと同様のテーマで報告がなされた。パネル討論では、「民」「民衆」の視点から歴史を読み解くことの重要性が指摘された。

以上が3年間の共同研究の経緯であり、本書にまとめられた4本の論文は、これまでの調査、分析、討論の成果である。以下、本書の構成を簡単に紹介しておく。

最初の韓哲昊の研究は、1910年「韓国併合条約」の強制的締結前後における「韓国併呑」に対する朝鮮民衆の対応と認識を実証的に分析したものである。秘密結社を結成した独立運動家や、学校の教師や学生、キリスト教信者など知識人だけでなく、市井の人々や「妓生」、子供たちまでもが、さまざまな形で「韓国併呑」への「反感」をもち、「不穩の言動」をなす一方で、植民地支配当局側の統制と監視によって、その恐怖と諦念から「沈黙状態」に陥っていたことを明かしている。

帝国日本の実態を把握するためには、都市や農村に生きていた朝鮮と日本の民衆をとらえねばならないという問題意識から、全羅北道にある港町、群山をとりあげたのが原田敬一である。「併合」以前の群山は、税関や警察など韓国政府の機関が設けられた、いわば皇帝の「勅令開港」地であったが、「併合」後はそれらを中心に港の官庁街が形成され、それを取り巻くように日本人街、その延長上に朝鮮人街が広がっていった。全体として日本的なものが拡大し、朝鮮的なものが縮小していった

植民地都市形成のプロセスが描かれている。くわえて、中国人商人の活動も見られたことから、日中韓の混在した都市であったことが明らかにされたことも注目すべき成果である。

金信在は、朝鮮総督府によって古跡観光地として開発された「古都・慶州」に注目した。朝鮮総督府は、1920年代から本格的に古墳を発掘し、遺物を博物館に展示するなど、近代的な遺物保存システムをもって「古都・慶州」をつくりだした。だが、朝鮮伝統文化の独自性を容認したわけではなかった。また、慶州が古跡観光地化され、修学旅行をする学校が増えるなど、「古都・慶州」が帝国主義的な文脈の中で広められる一方で、朝鮮人の民族意識が高められたというアンビバレントな側面が存在したと主張している。

太田修は、1937年に大邱の朝鮮人女子学生によって書かれた『女学生日記』を読解し、日常生活における植民地支配の様相を描き出した。1937年の大邱女子高等普通学校では、日中戦争の本格化を機に「皇国子女」教育が全面化していくが、その中で学校側と朝鮮人女子学生の間には摩擦や齟齬が生じていた。また、朝鮮人女子学生にとって「国語（日本語）」で日記を書くということは、日々精神的苦痛を受け続けるということ、それ自体に植民地性がはらまれていたことを指摘している。

私たちの共同研究のめざすところは「植民地朝鮮の日常を問う」ことであった。その目標について議論し、それに意識的ではあり続けたが、それぞれのテーマが計画的に選ばれ配置されたわけではなく、必ずしも十分に「植民地朝鮮の日常」を問いきれなかったのかもしれない。また、それぞれの研究テーマについても満足いくほどに深められたとはいえないかもしれない。私たちはこの3年間、なかなか思うようにいかない焦りやいたらなさを感じつつ、作業を進めてきた。行きとどかない点は今後の課題としたい。

最後に、共同研究の機会を提供してくださった佛教大学、および東國
大学校当局に、この場を借りて感謝を申し上げます。

共同研究者一同

植民地朝鮮の日常を閉ざす

日帝の韓国併呑に対する韓国民の認識と対応

韓 哲 昊

【要旨】 本稿では、100年前の日帝の韓国併呑に対して国内の韓国民がいかに対応・認識したのかを検討することによって、韓国併呑の性格とその意義を新たに把握しようと試みた。日本による強力な統制および監視、抑圧等のため韓国併呑に対する韓国民の動向ははっきりとは表れないが、このような研究が当時の韓国の状況を把握する重要な尺度になると考えたからである。そのために本稿では、日帝の韓国併呑の推進過程と併呑直後に韓国民がいかに状況を認識し対応していったかを把握し、日帝強占期に韓国民が国恥日を迎え、いかに認識し対応したのかを考察した。

1909年10月、安重根の伊藤博文処断後、一進会〔1904年に宋秉世によって設立された親日御用団体〕が本格的に韓日「合邦」を主張すると、韓国民は一進会に対して反感を抱いただけでなく、日帝の併呑推進に対しても直接・間接的に激しく抵抗した。このような排日思想は学校と教会においてさらに鼓吹され、全国に拡散する様相を呈した。教会では日曜礼拝に際して国権回復のために祈ることを定例とし、教師は学生に国権回復を強調し、二千万同胞の怨讐である日帝を必ず打殺せよと力説した。このように学校がまるで排日思想養成所のような役割を担ったので、幼い学生ですら日本人を倭奴^{ウナム}または怨讐と呼ぶ程であった。これに対して〔大韓帝国の教育行政を司る〕学部は、全国の学校に対して学業にのみ専念するよう訓令を出したが、特に効果はなかった。とりわけ私立学校は、排日思想養成所のような役割を担った。さらに妓生も討論会を開催し、国権回復の方法を模索したこともあった。また、新たに赴任した寺内正毅統監に対して非常に危険な内容の書信を送ったり、青年死団会のような秘密結社をつくるなど、日帝の併呑推進に反発した。

いわゆる「韓日併合条約」が強制的に結ばれたのち、韓国人の大多数は日本の嚴重な統制と監視のために積極的な抵抗を行なえなかった。しかし、日帝に国を奪われたという消息が次第に広く知られるようになると、民心が動揺し始めた。併呑発表の翌日、東大門の外には数十名が抗議のために集まったが日帝によって解散させられた。全国各地、各階各層でその鬱憤と恥辱に耐え切れず殉国をもって日帝に抵抗する人々が相次いだ。一部の学生は学業を中断して抗日の檄文を起草したが、発覚して逮捕された。

その後、日帝は内外において韓国「併呑」と「強占」を隠蔽すると同時に武断統治を実施し、国内では「国恥」を口にするのも難しい状況が続いた。しかし1919年の3・1運動以降、「国恥日」を契機に独立に対する熱意を拡散・高揚させる動きが活発化し始めた。日帝は、毎年国恥日を前後して小さな集会すら禁止すると同時に厳しい警戒を張ったが、韓国民は徹夜〔商店を閉める〕を断行し、太極旗を掲げて万歳を叫んだ。刑務所で服役中の愛国志士たちは断食あるいは絶食闘争を展開し、都市では「国恥記念警告文」等の反日檄文を散布して反日運動を呼びかける等、独立の意思を固くしていった。このような国内の動きとともに、中国など海外で活動していた独立運動団体も国恥日を契機に韓国内に要員を派遣し、絶えず反日活動を盛り上げようと努力した。

このように、日帝の韓国併呑の前後には、国内で反日の抵抗運動を絶え間なく展開し、3・1運動以後は毎年国恥日を迎えるたびにその意味を考え、独立回復を目指す動きが底辺から展開された。1931年の満洲侵略後、日帝が言論を徹底的に統制したのでその実状は伝わらなかったが、このような韓国民の抵抗の動きは1945年の解放の直前まで続いたのである。

はじめに

1910年8月22日秘密裏に締結され、8月29日に公布された「韓日併合条約」(「韓国併合に関する条約」)によって、韓国(大韓帝国)は日本帝国主義の植民地に転落した。「韓日併合条約」によると、韓国皇帝は韓国に対する一切の統治権を完全に日本国皇帝に譲与すると申し出て、それを日本国皇帝が受諾する——「任意の併合」を強調する——形をとっている。しかし、国際法学者としてこの条約の起草に参加した外務省の政

務局長倉知鉄吉は、「併合」は両国が互いに「対等」であるというニュアンスをもつ「合邦」「合併」や侵略的本質の表れる「併呑」ではなく、日本帝国によって韓国が「廃滅」したという点を明らかにしながらも、その語調があまり過激ではない用語を選択しようと苦心した末に作り出した単語であったとみずから告白した。⁽¹⁾

このように「併呑」「合邦」「併合」「合併」等の単語に微妙な意味の違いが込められているように、「韓日併合条約」に対する韓日両国の認識も、大きな違い、あるいは相反する様相を呈している。にもかかわらず、日帝の韓国併呑当時はもちろん、現在にいたるまで一般人のみならず学者、言論人すらも「併合」の意味を十分に把握できないまま「併合」または「合邦」という単語を無分別に使用しているのが実状である。したがって、日帝の韓国併呑に対する韓日両国民の認識を分析する作業は、「韓日併合」の性格とその意義を正しく把握するための重要な糸口を提供してくれるものと思う。

これまで「韓日併合」に関する多くの研究が蓄積されてきた。特に2010年には「韓日併合」100年を迎えて多くの研究が発表され、「韓日併合」の背景、過程および結果、そして「併合条約」の性格に関して詳細に明らかにされた。しかし「併合」によって大きな影響を受けた韓国民の反応、または認識に関する研究は、非常に少ない。史料の不足も一つの原因であるが、それは何よりも日帝が韓国併呑前後、そして日帝強占期にも韓国民を武力で抑圧したからである。さらに日帝は言論を徹底的に統制・監視し、併呑に対する韓国民の小さな反発や対応を隠蔽することに心血を注いだ。しかし、当時刊行された韓日両国の各種新聞、日記、著書などを綿密に調べると、「韓国併合」に対する韓国民の対応と認識を直接・間接的に知ることができる。

したがって本研究では、韓国民の「韓日併合」に対する認識とその特

あとがき

佛教大学と韓国・東國大学校との共同研究の成果『植民地朝鮮の日常を問う』をお届けします。「植民地」の只中に生きていた人々のさまざまな側面を解明し、その「日常」としての実像に迫る興味深い試みです。

植民政策ないし植民地経営にあつては、「本国」に経済的利益をもたらすことにその主たる目的が設定されていますが、もしもそれが圧政に傾くと、治安をはじめとして統治にかかるコストが膨れあがり、「本国」の財政的・人的負担が増大し、植民地から享受する利益よりも、それによって失われるもののほうが大きくなります。そしてその結果として、植民地を維持する意味そのものが失われます。したがって、いわゆる「住民慰撫」にとどまらず、植民地における経済活動によって現地住民にも一定の利益をもたらし、これによって植民地経営をつねに日常レベルで正当化しつづけることが、植民地経営にとって本領だと考えられます。しかしながら、植民地の実相を仔細に観察すると、こうした「日常」のなかにこそ、さまざまな矛盾・相剋が伏在することがみえてきます。両大学の研究者たちが、植民地の日常に焦点を当てて共同研究を深めた意義がここにあります。

長期間・長時間にわたるディスカッションの成果が、本書に収録された論稿のそこそこに滲みでていると感じます。当時の言論空間に見え隠れする意識状況を丹念に追った韓論文は、韓国併吞をめぐる韓国民各層の動向を掘りおこしています。日本人植民者の来歴と産業展開過程を追った原田論文は、建設された都市の特異な性格を浮き彫りにしていま

す。慶州に焦点を当てた金論文は、植民地文化政策としての古跡保存・古跡観光の狙いを解明しています。植民地都市の模範的女学生の姿を描いた太田論文は、植民地教育と生徒とのあいだの緊張関係を特徴づけています。この四つの力編を読むことによって、『植民地に生きる』とはどのようなことなのかを理解できます。

とりわけ韓哲昊・金信在両先生の労作は、韓国における日帝時代研究の新段階を提示したものであると言えるでしょう。本書に寄稿された両先生にあらためて感謝いたします。

佛教大学国際交流センター長 野崎敏郎

執筆者紹介（収録順）

①生年・出身地 ②最終学歴 ③職歴 ④主な業績

韓 哲 昊（한철호／Han Cheolho）

- ①1959年生大韓民国ソウル特別市生。
- ②翰林大学校大学院史学科修了。文学博士。
- ③東國大学校師範大学歴史教育科教授（韓国近代史）。
- ④『親美開化派研究』（国学資料院，1998年），『韓国近代駐日韓国公使の派遣と活動』（プルン歴史，2009年），「韓国における最初の国旗（朴泳孝太極旗，1882）と統理交渉通商事務衙門の製作国旗（1884）の原形発見とその歴史的意義」（『韓国独立運動史研究』31，2008年）。

原 田 敬 一（はらだ けいいち）

- ①1948年岡山市生。
- ②大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。
- ③佛教大学歴史学部教授（日本近代史）。
- ④『日本近代都市史研究』（思文閣出版，1997年），『国民軍の神話——兵士になるということ』（吉川弘文館，2001年），『日清・日露戦争』（岩波新書，2007年）。

金 信 在（김신재／Kim Sinjae）

- ①1960年大韓民国慶尚北道榮州市生。
- ②東國大学校大学院国史学科修了。
- ③東國大学校国史学科教授（韓国近代史）。
- ④「『独立新聞』に表れた愚民観」（『東学研究』25，2008年），「1920年代，古跡調査整備と都市変化」（『新羅文化』38，2011年），「1910年代，慶州の都市変化と文化遺跡」（『視線の誕生——植民地朝鮮の近代観光』先入，2011年）。

太 田 修（おおた おさむ）

- ①1963年兵庫県生。
- ②高麗大学校大学院史学科修了。文学博士。
- ③同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授（朝鮮現代史・近現代日朝関係史）。
- ④『日韓交渉——請求権問題の研究』（クレイン，2003年），『朝鮮近現代史を歩く——京都からソウルへ』（思文閣出版，2009年），「二つの講和条約と初期日韓交渉における植民地主義」（李鍾元・木宮正史・浅野豊美編『歴史としての日韓国交正常化Ⅱ 脱植民地化編』法政大学出版局，2011年）。

翻訳者紹介

呉 仁 済（오인제／O In Je）

- ①1983年広島県生。
 - ②立命館大学大学院法学研究科法学専攻（博士前期課程）修了。
 - ③同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科現代アジア研究クラスター（博士後期課程）在籍。
- 翻訳「日帝の韓国併呑に対する韓国民の認識と対応」

佛教大学国際学術研究叢書 3

しよくみん ち ちようせん にちじよう と
植 民 地 朝 鮮 の 日 常 を 問 う
だい かいぶつきようだいがく とうこくだいがくごうきようせうけんきゅう
第 2 回 佛 教 大 学 ・ 東 國 大 学 校 共 同 研 究

2012(平成24)年12月20日発行

定価：本体2,800円(税別)

著 者 韓哲昊・原田敬一・金信在・太田修

発行者 佛教大学学長 山極伸之

発行所 佛教大学国際交流センター

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96

電話 075-491-2141(代表)

制 作
発 売 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781(代表)

印 刷
製 本 株式会社 図書 同朋舎

© Bukkyo University, 2012 ISBN978-4-7842-1660-4 C1021